

懇談会：「国土計画考」－その11－

出席：今野修平氏・国土計画研究会メンバー

日時：平成18年9月27日（水）

場所：ホテルプレジデント青山「ファンクションルーム」

今野 前に項目を並べましたが、今日はその項目に従ってメモをつくってまいりました。大きい1番の「民族の歴史と国土政策」の②「国民の要求の変化」というところが、この前、時間がなくてあまりやっていないので、そのメモと、その次に「国土政策論」の①「国土政策とは」。この1の②と2の①と2つメモをつくってまいりました。

それから、毎月1回くらいのペースで、『交通新聞』の社説がわりに「交通評論」という欄がありまして、書かされております。そのうち、国土政策にかかわることと、それから「品格高い国土」というのをコピーしてまいりました。

もう一つの材料は、今日の2の①、国土政策とは何かという議論をする際に、フレームの話を出すのですが、その参考資料として、9月6日の朝日新聞に「正確な人口推計 可能か」という特集記事がありました。こちらとしては非常に助かりまして、推計のことをこっちに書かなくてもこれで代行させますので、推計論の中にはこういう問題を抱えているんだということをこれから読み取っていただければ、と思います。こういうことで資料を用意しました。

では、一応「検討課題メモ」ですから、検討課題のテーマをうまく浮き上がらせられればということで、解析的なことはちょっとさぼっております。

1番に、どうもいままでのことを見てみると、国土政策というのが出てくる背景は、どうも国家存亡の危機と深くかかわっているのではないかという勝手なことを考えています。日本史の中で国家存亡の危機がいつあったのか。私の浅い歴史の認識では、第1に、統一国家形成期にあったと思っております。

古代史を調べるとわかりますが、日本はかなり長いこと朝鮮半島に進出していて、あれを前提にすれば、釜山、木浦付近の南側の海岸地帯が日本領土になっていても不思議ではないくらい、何百年か勢力をあそこに張り付けていたと

いう歴史があったのですが、それが最後に白村江の戦で敗れまして、全部引き揚げたわけです。引き揚げたときというのは巨大国家・唐が成立したときで、唐が攻めてくるということで、日本史の中では非常に緊張した時期がありました。特に西日本全体から防人を北九州地域中心に配置いたしまして、この状況は、万葉集にたくさんある防人にかかわる歌が大きな証拠になっています。

それから太宰府を設置する。太宰府の設置を歴史的に見ますと、海岸線ではなくて、那津（なのつ）というのがいまの博多港の前身ですけれども、そこが経済の中心だったのに、わざわざ内陸の引っ込んだところに政治の拠点をつくったというのは、攻めてきたときのゆとりを持つための対応だと、こういうことを言っている歴史学者もいるようでございます。西国全体が防衛しなくてはならないということで、非常に緊張した状態があった。

遣隋使・遣唐使が派遣されるというのもこれと絡むわけございまして、外交の問題が初めて歴史の正面に浮かんでくるということです。

それから城づくり、水城・山城という形で、防衛を町づくり、地域づくりの拠点にしなければならないということがこれと絡んで生まれたようでございます。一時、都を大津に移すのも、唐が攻めてきたことを前提において起きたようでございます。

そういうときに、国全体が日本民族という形でかたまってくる幾つかの行動の一つがこれだったと思うわけですが、それと内面的には統一国家が誕生して、五畿七道、国府と国分寺の配置。国土のフロンティアの拠点としては、仙台の東にあります多賀城に第二の太宰府をつくるという形で両翼を固める体制をつくります。そして律令国家の体制をつくり上げて支配体制を強化する。

それに対して、防衛やその他にカネがかかるように外交にもカネがかかることになりまして、民族を単位とする国家という社会ができ上がる、そういう感じになってまいります。当然、経済力も必要になってくるわけでございます。そして、歴史の中でこの時期は渡来人が非常にもてる時代ございまして、近江の国の歴史なんかを見ますと、渡来人が開発した技術というのが瀬戸物から何からいっぱいあって、集団移住をしている。いまだに地名が残っております。

それから地下資源の開発が進んで、その余韻が奈良の大仏様になるわけですが、それから班田収授、全体にそうした形で技術開発もこれあり、国土開発が進んだ時期とほぼ符号していくと考えていいのではないかと、こんなふうに思っています。

2番目は、元の襲来です。これは私が説くまでもなく鎌倉武士の体制が確立した後でございまして、九州の防衛に鎌倉武士が動員される形になりまして、幕府の管理体制が強化してくる。鎌倉街道はその背後の交通開発として進められるということでございます。防塁が建設され、西国防衛が起きて、民族社会を背景にした課題に取り組むということでもあります。

その後、存亡の危機というのは、大陸の勢力との絡みもありまして、安土桃山時代から江戸時代初期は日本経済の大成長期ですが、そのとき大陸では、明が衰えて清に代わる時期でもありましたので、日本への脅威が消えていたのではないかと思います。したがって日本では、朝鮮征伐に行つて敗けて引き揚げてくるのですが、古代国家のときのような危機感はどうもなく、むしろみんな動員されて喜んでいたという実態にあったようです。そこは条件が違って、国土開発が進むのと絡まないんです。

明治の近代化は、米・露の開国要求、特にロシアの脅威というものが非常に大きくなって、北辺の防衛というのがあった。私は、北海道開発の原点というのは、人口増——人口増は江戸時代末に起きてまいります。それに加えて武士階層が失業者になりますから、それのはけ口として北海道というものが、国土開発上、大きく浮かび上がってまいります。ご承知のように、開拓使制度による北海道開発が国策として大きく取り上げられるという国内要因があった。国際要因は、当然、防衛、外交が主体になるわけで、不平等条約の改定も含めて防衛ということで、これも地域的には北海道が非常に重くなるということで、民族国家を支えたということになるかと思います。

さらに、その中で富国強兵策、殖産興業、脱亜入欧、帝都建設ということがよく言われますけれども、その富国強兵策の一環として鉄道開発や港湾開発が行われるということだと思います。

東海道本線の全通が明治22年ですが、東北本線は明治24年で、実はたった2年しか遅れていない。日本で2番目に開通した鉄道ですけれども、なぜあんな経済力のない東北の鉄道をそんなに急いだのかというと、津軽海峡と北海道の防衛で、軍隊をすぐに送れるようにということで作られたわけです。

ところが、開発してみると、東北本線は山の中を走ることもありまして、福島と白石の間とか、二本松と郡山の間とか、何カ所かが勾配がきつい。輸送力があまりなかったのも、これでは軍隊を即刻送ることはできないというので、したがって東北線を補う常磐線の開発も非常に早くて、明治30年には全通しているということで、一旦緩急時には、常磐線を通って青森へ行くという体制まで整える。

港湾のほうは最初に開発したのは函館ですが、次いで小樽に着手します。これは広田勇という人が港湾計画を立ててつくります。明治になってからの第1号の近代港湾建設というのは、野蒜という松島と石巻の間に、オランダからバンホーテンという工学者を呼んでまいりました。内閣総理大臣と同じ給料をやるから来てくれということで日本最初の近代港湾を計画しましたが、日本の海の事情に疎くて、開港3年で台風でつぶされるということがありましたが、歴史の上では野蒜が第1号の近代港湾として建設されます。小樽はその後になるわけですが、そういうことは全部国土防衛と絡んでいるということで、統一国家誕生時と同じような背景があって、大変だ、やられてしまう、日本がなくなってしまう、ということで民族が固まっていくということだったのではないかと。そういう背景をつくったのではないかと、こんなふうに思っております。国民が結束する手段として天皇制を導入してくる、ということだったと私は考えています。

その次の危機感とは第二次世界大戦中の国土計画でございました。本土決戦用の国土再編ということでもあります。アメリカ軍が太平洋側に上陸して占領してきたときには、細長い日本列島を分断すると想定いたしました。分断してもなお抵抗できる国にするということで、具体的にやったプロジェクトは、そのために工場の疎開までやるわけですが、思想的には戦後の毛沢東の「人民の海」

思想に似ていると思います。自給自足型ゲリラ戦用の国土、こういうふうに書いておいたのですが、その中では帝都移転まであります。話としては満州移転の話まであったわけですし、現実には長野県松代に帝都移転して、天皇陛下、参謀本部は全部松代に行くということで、大地下壕都市をつくった。玉座まで地下につくりました。

A氏 現実にはかなりつくったのですか。

今野 ええ、その跡が残っています。その防衛第一線は、私がいま住む八王子の高尾に、これも大地下壕防衛基地でございました。アメリカ軍が上陸してきて関東平野を怒濤のごとく攻めてくるけれども、松代を攻めに行くために、山に入るところの一番手がいまの高尾になりますね。桶狭間と同じ論理です。大軍隊が一行になるから、そこで一網打尽にやろうということ考えたわけです。

B氏 先生、素案だとソウルもあったと聞きましたが。

今野 そうそう、ソウルという案もありましたね。

B氏 福岡県の八女市、もう一つはいまの岡山県の長船町、その3つが素案にあったと書いてありますね。

D氏 それは誰の本ですか。

B氏 これは、例の本間さんの本（『国土計画を考える』岩波新書）の紹介の一部ですけどね。41年計画でそういうものがあったと。

今野 ただ、戦後、戦争中の国土計画というのは公には語られることなしと

いう形で来ました。それは何かというと、8月15日に終戦になりまして、国の基本戦略だからというので8月15日から9月4日までの間に徹底的にみんな燃やしたんですね。したがって、我々がいま勉強しようとしても手がかりがないのです。

企画院は昭和14年にできたんですか。各省から動員されまして、私の母体である港湾局からも東さんという方がいて、私が若くて生意気な頃にOBになりまして、その先輩からもいろいろ聞かされました。

ただ、いま残っているのは、古今書院というところから『資料・国土計画』というのが1冊残っています。それは酉水さんという方が、そのときの役所から、自分のやった仕事にある程度限定した形でそれを持ち逃げしまして、自宅の庭を掘って、石油缶に入れて埋めたやつを後で本にして出したという貴重な資料で、いま、それだけが手がかりなのです。

B氏 『国土計画の経過と課題』という本ですね。

今野 そうです。

B氏 1942年に「大東亜国土計画大綱素案」、その次に「中央計画素案」と、要綱案……、何かそんなふうなものがありましたね。

今野 そうです。いまでも、固有名詞としての国土計画と一般論としての国土計画と、我々は仕事場で同じ言葉を使い分けていますけれども、固有名詞としての国土計画というのは戦争中につくった国土計画なんです。ただ、下河辺さんの話や何かを総合してみますと、やはり状況判断が変わりますね。最初は大東亜共栄圏主体で考えていたけれども、昭和17年末から戦況が悪くなってくると本土決戦になってくる。そういう形でテーマが大きく変わったように聞いています。当然だろうと思います。

D氏 私なんかは小学校に入る頃から戦争が始まって、18年に疎開したんだけど、東京の中は全部それこそ防災対策で、町自体が強制疎開をしていましたね。

A氏 帝都移転計画のあたりで石川栄耀さんは何か関係しているのですか。

今野 当然、関係していたと思います。

D氏 だけど、石川さんの一番古い本には、あんまり戦争中の話は出てこないですね。

今野 出てこないです。石川栄耀さんが中心になってやったのは満州開発です。

C氏 石川栄耀さんは、戦争前から戦争中にかけて随分軍の肩を持っていたように見られたところがあって、戦後、そこから意識的に離れているところがあるんじゃないですか。だから、むしろ戦争中の話は語らなかったのではないかと思うんですけどね。

A氏 井上先生と一緒に、上海で石川栄耀さんがつくった首都といいますか、都市があって、それを探しに行ったんです、たしかこの辺だといって。で、実際にありましたよ。その本部は学校になっていました。おっしゃるように満州とか上海とか、日本の攻め込んだ先、占領先のところでいろいろ仕事をしておられた可能性はありますね。

B氏 当時の国土計画というのは満州まで含んでいたということですか。

今野 最初の段階はそのようです。その代表例は「五族協和」なんて満州の

ときに言い出したでしょう。そのための国をつくるということでした。それで大東亜共栄圏につながっていくわけです。

C氏 さっきおっしゃった中央計画というのは本土の計画なんです。黄海・渤海計画の中の中央計画が本土の計画。

今野 戦争が激しくなって本土決戦対象になってくると、もっと極端なことを言えば本州の防衛策なんですよ。

C氏 最後は決戦人口配置案とか出てきますからね。

今野 私がこの領域に入って行って、あと防衛庁にいたでしょう。防衛庁にいたときにある資料を見る機会があったんだけど、その当時のアメリカ軍の侵攻ルートというのはピタッと当たっていますね。日本陸軍はちゃんと読んでいた。それは、海から攻めてきたときに大量の軍隊を短い時間で上陸させるには、それなりの海岸地形（海浜）がないと上陸できないわけです。上陸用舟艇というのはその必要から発明された船です。それがいまのフェリーにつながってくるわけです。

その主たる海岸というのは、北からいきますと、仙台湾の海岸。私の郷里です。一番の主力が鹿島灘、九十九里浜。それから相模湾にも一部あがって、あとは遠州灘。そこから北に上がって行って谷沿いに進めて行って、本州を分断するという計画なんです。その分断されることを前提にした防衛策をつくるわけです。分断されてもなお抗戦能力のある地域にすると、こういうことですから、そういう意味でベトナム戦争なんかに共通しています。

B氏 いまのことで、まさに沖縄も南北を分断するというふうな上陸の仕方をするんですね。

今野 そうです。僕はそういうことを、もう間違いないなと思った最後のヒント提供者は琉球政府最後の主席の屋良朝苗さんですよ。屋良朝苗さんにひと晩、那覇の波の上の料理屋で沖縄戦の経緯を事細かに講義を受けました。それで僕は、僕の郷里でこういうことがあったと言ったら、「今野さん、それは敵前上陸する前兆ですよ」と言われました。

それは何かというと、昭和20年の7月だったですか、アメリカの連合艦隊が仙台湾の近くをウヨウヨしていきまして、そのうちの一晩、一晩じゅう照明弾を撃たれて、夜明けまで昼間のように明るい日がありました。住民も軍隊も防衛軍も、ものすごく動揺しますね。それから、毎日毎日、艦載機が空襲に来るんです。これも神経戦なんですね。艦載機なんていうのは小さいから、持ってくる爆弾だって小さいので、当たっても1軒が燃えるだけだから大した話じゃないけど、僕の田舎では、列車が機銃掃射を受けて何人か死んだとか、鉄橋爆破のための爆弾を落とされたのが外れて民家に当たったとか、そういうようなことで損害そのものは大した話じゃないんだけど、とにかく毎日欠かさず来るといってはものすごい神経戦ですね。8月14日までありました。

D氏 8月14日は私は秋田にいたけど、土崎の空襲がありました。

今野 そうですね。B29が私の郷里の真上を飛んでいきましたよ。

D氏 土崎の製油所だけやられたんです。

A氏 ドイツは攻め込まれたときにやはり同じことをやっていたんですかね。

今野 ドイツは攻め込まれる前提の段階は空中戦ですね。大陸からドイツ空軍がイギリス主体に攻めに行く。米英もイギリス基地から大陸に攻めに来るといことで、空からの激しい攻撃にさらされたのは、イギリスとドイツ両方なんです。ドイツの代表はドレスデンでしょう。イギリスの代表のところはマン

チェスター、バーミンガム。徹底的に空襲でやられた。ロケットまで使いましたからね。ドイツが最終的になったのは地上戦でフランスから撤退してきてからですよ。あの後、ドドッと東西両方から地上戦でやられましたから、その時点になると以前より激しくなるんだけど、空軍の攻める戦力としては「従」になるわけです、主が陸軍になって。

A氏 日本とは国土が違うから、そういう点が違うんですね。

今野 ええ。

D氏 終戦近くなってからでしょうけれども、例えば九州の独立論とか、そういう動きも随分あったのでしょうか。

今野 北海道の独立はくすぶっていたですね。その背景の根っこは、戦争中の日本列島を分断されたときにどう生きるかという、あの国土計画が心理的にはつながったと思います。

C氏 総監府か総督府か、どっちか忘れましたがけれども、できますよね。終戦ちょっと前に、各ブロックごとに中央政府に準ずるような組織をつくるんですね。

今野 その辺の思想は連合側に通じておって、ポツダム宣言を受託するときに、ロシアが、日本を壊滅したときには北緯38度線以北はソ連に占領させてくれと申し出ています。

A氏 38度というのはどの辺ですか。

今野 私の田舎、仙台の南です。仙台と新潟を結ぶ線と考えてもらえばいい

です。だから北海道・東北ですね。その論理に従って千島列島をみんな取られるわけです。それでアメリカが拒否するんです。そのために北海道は助かるわけです。

A氏 拒否してくれたんですね。そうしないと、ベルリンになっていましたね。

今野 ええ。西日本だけはそれをやりましたね。四国はイギリス軍ですか。20年9月にイギリス軍が駐留したんです。

C氏 たしか分割案がありましたね。

今野 分割統治。

C氏 現実に駐留していたのはイギリスなんですか。

今野 そうです。イギリス軍は平和条約を結ぶ前に引き揚げましたけどね。それから蒋介石が九州かな。九州と割り当てられたんだけど、大陸のほうで忙しくなって日本に出てこられなくなってしまった。それが分割統治が崩れた最大の要因です。それで本州はアメリカ。それを知っていてロシアは北海道が本音だったというんですよ。だけど駆け引きですから、東北までよこせと最初に言い出したというふうに聞いています。

A氏 米・英・中・ソですものね。

今野 そうです。

A氏 さっきの金さんの話ですけれども、九州もずっと歴史的に独立論があ

りますよね。これはいまのと多少関係しているのですか。

今野 そういう歴史と関係しているのではないかと思います。沖縄はまた別で、分割論はよくわかる。論理が通っている一面もありますね。

A氏 私たちが小さいときも本土、本土と言ってましたから、やはり距離があるという意識でしたね。

今野 東アジア経済圏の拠点と言っている福岡を中心にして、いま、そういう考え方が盛んになっていますね。あの根底にも何かにおいがしますね、東京、大阪とは違うぞという。

C氏 薩摩隼人とか熊襲とか言われていた人たちというのは、土着でいたわけですから。

今野 まあ、いろいろな解釈がありますけれども、こういうふうに古代から一貫して見てみますと、九州の経済というのは明らかに近畿以東とは違いますよね。大陸との関係を常に持っていた。表に出るなり出ないなりはあるけれどもーと思います。その最も濃縮なのは沖縄だと思いますが、やはり近畿以東は間接的ですね。

D氏 その頃、そういうプランニングは内務省がやっていたのですか。それとも軍ですか。

今野 国土計画そのものは、今日的に言えば内閣官房企画室です。関係する分野から各局1人ずつ、エリートたちがそこに呼び集められたんです。49年の国土庁設立と同じです。国土庁も総理府でしたから、この人たちの採用は総理府。

C氏 企画院のことをおっしゃってますね。

今野 ええ。それで作業をやったんです。当然、軍と直結していた。

それから、戦後、国土総合開発体制の確立というのは、国家存亡の危機という線では共通しているのですが、安保体制の確立で、外からの圧力はなかったけれども、食糧難、住宅難等が、昭和20年のときに厳しかったということです。

これは前にも話しましたがけれども、もともと戦後の体制をこまめにつぶしてみますと、この昭和20年代の国土政策というのは、北海道・東北開発と、戦災都市における住宅供給という大都市圏整備、この2つなんです。それが、30年代になるとかなりゆとりが出てきて、ゆとりが余るようになってからも、国家存亡の危機につながる問題がなかったかといえは嘘で、いろいろ問題はありました。48年の石油ショックでも、堺屋太一じゃないけど「油断」という状況が起きるし、資源は有限だという認識が強くなりました。環境問題も非常に危機的な状況だったし、60年代は財政難で大借金国家になっていく。

そんなことを考えてみますと、国家が今後成り立ち得るかどうかという存亡なんです。昭和20年代とか明治の初めに比べると、問題は小さかったということは言えようかと思えます。そのために安保体制が、外からの圧力がないだけに機能していたかというのは、非常に大きいと思っております。その結果が国土計画の不要論になってくるのだらうと、こんなふうにも思っています。

国家存亡の危機というときに国土計画が出るというのは、諸外国でもあるんです。我々が教科書的に外国の国土計画はどういうのがあったかと学生に講義するときには、4つか5つを挙げますが、一つはアメリカのTVAです。もう一つはイギリスのランドユーズプランニング（国土利用計画）、もう一つはソ連のコンビナートの工業再配置、もう一つはイタリアの南部開発です。フランスやドイツもありますけれども、そういう意味では非常に弱い。

フランスの大規模プロジェクトは、北部のトライアングル構想から始まって南部のラングドック・ルシオン開発、大西洋岸のマリン開発、それから交通体系、井桁論と俗称呼びますが、幹線の整備とか、フランスもいろいろやってく

る。切迫感は国家存亡の危機というようなことはないけれども、ナチスが生まれたために、ソ連でもイギリスでも今日の国土政策論の原点になるものが起きたということは、やはり国家存亡というのも、国土政策というのはそれが非常に大きなインパクトの政策なのではないかなと思ったりいたします。

D氏 そういふショックが一つのきっかけではあるけれども、昭和60年代以降というのは、冷戦構造の崩壊みたいなものが日本でもヨーロッパでもあって、かつての国家計画みたいなものが後退したんですね。

今野 ええ。

そこで幾つかのメモをつくってきました。議論の対象にこういうことをこのディスカッションでやったらどうかと思ひまして。一つは、「歴史上、国土開発が進んだ安土桃山時代から江戸時代初期は国家存亡の危機はあったのか？」ということで、徳川家康の統治論などをもっと勉強したいなと思っています。結果としては、徳川家康が行ったものはものすごく国土計画的です。いわゆる交通整備から始まりまして、江戸のまちづくりから利根川の付替え、諸大名の配置に至るまでものすごく国土計画的です。その思想的背景はどうだったのか。これはこういう立場で見ているせいか、歴史をいくら引っ繰り返してもなかなか引っかからないですね。だけど、私は問題意識としてはかなり持っています。

それから、今後のことも考えまして、「中華思想の強い隣接の中国の歴史上の盛衰は日本の民族結集力の強弱に影響しているか?」。あそこに強大な国ができて、隋が統一して以降、平均すると1つの国家が400年くらい続くんです。そのうちの前半の100年がものすごい勢いで伸びるわけです。あとはだんだん崩れてきますから、中国大陸における国家の社会生態論的なことを言うと、統一国家ができ上がった100年間というのは、周辺、例えばチベットやウイグルなんていうのは、毎回、中国の支配勢力圏に入るのですが、後半になって統制力がなくなってくると、みんな独立するわけです。

これを日本に置きかえますと、海があって直接武力を使えなかったり人が動

けなかつたりしたから、日本列島の国土には直接影響は数回しかないけれども、実はあの法則性からすると、日本が中国を脅威に感じるのは、中国の統一がグッと進んだ建国100年間だけなのではないかと思います。

最近の靖国問題などでも、非常に高飛車に出てきているのは、まだ中華人民共和国はその時代だからなんだろうと思います。あと50年たって綻びが出てきたときには、中国というのは政治的にあんな高飛車に我々に対して出られないのではないかという気がします。それは中華思想と結びついていて、俺は天下の皇帝である、朝鮮もベトナムも日本もウイグルもチベットも王である、というわけです。いわゆる徳川幕府の征夷大將軍と諸藩の藩士との関係、あれと全く同じ形で見ているわけです。

それから、「民族意識の高揚は国土防衛上力となるが、国土開発の必要性認識との関連は何か?」。これも、議論し出すと実はフロンティア論とも結びついてくる課題になります。そういう意味では議論の題材としては議論したいなというテーマの一つです。

内面的な理由としては、明治維新から戦後に至るまで人口増加を脅威と感じていた。内的要因としての脅威論というのは人口問題なんですね。今回、人口が減少するという時代に入りましたから、そこのところ、大きく哲学の一つの柱が崩れてくるということもあるかと思います。

D氏 人口問題が主になっていたというのは、いわば食料自給率との関係ですか。

今野 そうです、食糧問題です。

D氏 農村が崩壊したことによって、逆に言えばその足場もなくなってきたと。

今野 そういうことになるでしょうね。北海道開発法なんていうのは、第1

条に「人口増加に対応するため」と、いまだにはっきり書いてあります。北海道開発法は国土総合開発法より早くできましたから、まさしくそれなんですね。

D氏 人口の規模は何が最適か、というのはなかなかつかみようがないですね。

今野 ええ。

A氏 もし国土計画の一つの目的が食糧確保ということであるとすれば、これだけ食料自給率が下がっているというのは、ある面では国土計画は失敗したということも言えますね。

今野 そうです。読めなかったということでしょうね。それは後でまたフレームの問題のところで話します。

D氏 それは各時代ごとに、貿易問題もあって、鎖国の時代と開放経済体制とで全部違いますよね。

今野 グローバリゼーションが進んできてから、経済学の一つの流れとして「脱マルサス論」という流れがあるでしょう。日本は特にこういう国土だからそれが大きく出ているけれども、世界的にそういう考え方があるわけです。むしろ、マルサス論に代わる課題として認識しなくてはならないのは環境問題だと思います。

D氏 だけど、食糧の次は環境制約があって、いわば国の規模が決められるという話にはならないのではないですか。

今野 ただ、環境問題の影響は食糧だけではないですからね。

A氏 民族意識というのは、例えば明治時代の民族意識と高度成長期の民族意識と質は違うけれども、やっぱりありますね。

今野 底に流れる共通しているものはありますよね。

A氏 高度成長期は、日本が日本国民というのを非常に意識した時代ですね。外貨準備が少なくて、日本は経済として世界の中で追いついていけるのかという危機感があって、防衛面での民族意識と経済上の民族意識とは違うわけですね。でも、民族意識というのは国土計画の前提としてあったんでしょうね。

今野 前提として取り組まざるを得ないことではあるんですけど、ただ残念ながら、民族意識とか県民性というのは感性的問題提起なんです。だから扱いつらいんです。

C氏 国土計画と民族意識ということを見ると、戦争中のドイツの国土計画というのはまさにそうで、優秀なゲルマン民族を再生産するために田舎が必要だという考え方がベースにあったと思います。つまり、農村で育った青年は元気に育って変な病気も少ない。だから田舎に定住させるという、ジートルという施策をとるわけです。要するに定住構想です。それは、ゲルマン民族をいかに高揚していくかということで民族意識と結びついたと思いますし、日本でもそういう意味では戦争中は似たようなものですね。

経済的な部分での民族意識というのは、にわかにはわからない部分がありますけれども、やはり戦争状態の中の民族意識は国土計画と結びついているだろうなという感じはします。

今野 経済的な問題としては、終戦直後の昭和20年代はどう計算しても食糧は間に合わないんです。当時は戦争に負けて外交権はなく、戦勝国への賠償をしなければならぬと全国民が受け止めていましたから、国外から食糧を輸入

するという発想はほとんどなかった。それは国内的には、カネがないとかそういう問題があったでしょう。閉じ込められちゃったわけだから外に向かない。そういう意味で自給率が40%に下がったというのは、当時から言うと言想もつかないものすごく大きな変化ですよ。

マルサス人口論もナショナリズムの盛んな頃に出てきた理論ですね。いまになってみると人口の増加と食糧の生産力の伸びなんていうのは、地球的視点がなくて国単位での話になっているわけです。

C氏 そもそも戦争になる前の状態を考えると、世界大恐慌でブロック化するわけですね。それぞれが自己完結的に生きなければいけないという中で、イギリスが圧倒的優位の中でアメリカは面白くない。アメリカが参戦するときに作った憲章というのは、まさに自由貿易というか、自由化するというのを約束して参戦するわけですね。そういう状況がまだ読めないというか、なかった日本にとっては、自給自足が前提でそういう国土計画を立てて、戦争に突入するという必然みたいなものがあったんじゃないですかね。

ですから、終戦直後の国土計画基本方針にはその反省が書いてあります。現実的ではない自給自足体制を確立するために無謀な戦争になった、これからは平和国家を国土計画の方針とすると、そんな話になるんですね。そこはまさに戦争が終わってグローバリゼーションの扉が開かれたから、いまのこういう議論になっているけれども、それまでは自給自足しないと、あるいはブロック化して少しでもパイを大きくしていかないと、生き延びられないという前提があったのだと思います。

今野 それがあったから満州にも出ていくわけです。それから、台湾と朝鮮半島の評価もみんなそれを前提にしてやっているわけです。つまりあの頃は、グローバリゼーションが進んだ今日から見ると、極めて厳しいというか狭いナショナリズムの世界だったのです。そのナショナリズムが崩れたということが、思想の転換の中で絶対触れなくてはならない大きな理由の一つですね。

それからもう一つ、細かい具体的な話としては、当時の食糧というのは、戦争中は特にそうだったけれども、一番大事なものは何かといたら「五穀生産」と言ったんです。五穀というのは、コメ、麦、粟、豆、ヒエ。その食水準だったんです。

ところが、国が豊かになって海外から食糧を買い取れるようになってから、これがガラッと崩れたわけです。その崩れた証拠の一つは蛋白質の摂取源です。日本人の蛋白質の摂取の状況を年代別に見てみますと、昭和20年代は蛋白質が摂れないところがあった。したがって各家でニワトリを飼って卵を蛋白食品に充てていた。

それが、30年代になると魚が食えるようになったんです。漁船や何かも増えてきて。20年代の最初は、船がなかったから魚も食えなかった。それから、漁業者は船乗りだから集中的に海軍に徴用されました。それで、30年代に一番伸びるのは魚です。40年代になると鶏肉の伸びが一番大きいのです。50年代になると豚肉になります。60年代になって牛肉が一遍に増える。グラム当たり、より高い蛋白質源に変わっていくわけです。相対的に炭水化物の比重が下りました。

そういうことを考えると、食水準の変化というのも非常に効いているのです、マルサス理論をぶっ壊していく一つのベースになると思います。

C氏 終戦直後、日本は海外に行くことができなかった時期がありますね。ただ、蛋白源の供給は重要だということで、マッカーサーが許した海外に行く一つが遠洋漁業（捕鯨）なんです。捕鯨だけは外国に行くことを認めたものだから、廉価な蛋白源というのはずっと鯨の肉だった。それが給食にまでなるんです。いま、鯨は食えなくなりましたがけれども、鯨の肉があれだけ流行ったというのはそういう背景があるわけです。

B氏 先生、この民族意識の民族という言葉と国民という言葉、わざと「民族」になっているのですか。

今野 現代を考える上で一番の原点は、やはり民族を見なくてはならないと僕は思っているんです。その民族が一つになったときに国家を誕生させるわけでしょう。だから、いまのウイグルとかクルドというのは、民族としてはあるけれども、国家をつくり上げていく結集力に欠けているわけです。国家は権力的な社会だけど、民族というのは文化を背景にしています。したがって共通性としては「民族」という言葉を使ったほうがいいかなと思って書いたものです。

A氏 戦前は、民族というと大和、国家というと日本、何かそういう使い分けをしていましたね。

B氏 ナチスなんかは言ってみればレイシズムの世界があるから、民族という感じがありますね。

今野 ある意味ではナチスはナショナリズムの純粋な解釈をしたと言ってもいいわけです。ただ、ドイツ人がエリートで他の民族がダメというところが、ナチスが道を間違った大もとだと思います。バルト海沿岸のドイツ人居住者、ハンザ同盟がつくっていった島型のドイツ人居住者というのは、民族としては本来ドイツであるべきなだけども、国家権力が誕生して一次大戦、二次大戦を通してドイツ人は結局負けたわけです。だから、その不自然さはあると思います。

バルト海沿岸をサンクトペテルブルクまで上ると、ドイツ人の居住地域というのは、ある意味ではかつてのドイツにおけるユダヤ人と同じ立場にあるのではないかと思います。そういう意味では客観的にいまの国家権力でつぶしているというのは、その一番顕著な例はアフリカなんだけど、国家があまりにも人為的対処の上に成立し、非常に不自然さをもたらして、それが不安定要因の一つになっているわけでしょう。

D氏 日本の場合、どうですかね。明治になってからは富国強兵策が軍の中

心になって、いわば統一国家になった形になるけれども、江戸時代以前はどうだったんですかね。

今野 全く日本という意識はないといえるのではないですか。

D氏 ないでしょう。それから、民族という意識もないんじゃないですか。

今野 民族という意識もないですよ。そこを言い当てているのが司馬遼太郎の「くにあって国家なし」の言葉だと思います。

A氏 確かにイギリスもユナイテッド・キングダムと、一つの国家としてはあるけれども、伝統的に民族というのは違って、スコットランドと北アイルランドが一緒でしょう。スコットランドはいつもやられているんだけど、スコットランドの国王がイングランド国王になったから、結果的にそこでキングダムとして統一されたという形になっているわけですね。

今野 スタンダード・ヒストリーと我々は習ったけれども、そういうヨーロッパの歴史を見れば、国のほうが後から出た社会ですからね。

D氏 確かにそうですね。

今野 地域のほうが先ですから。ある意味では日本はまだ地域意識がかなり強く残っていて、これと絡むんだけど、民族存亡の時期を迎えるがゆえに民族国家をつくったわけでしょう。そこに無理があるわけです。中から出てきた勢力ではなくて、外圧によって出てきたものだから。その矛盾をつないだのが天皇制なんです。天皇制を使ったわけでしょう。天皇制をうまく使わなかったら、第二次世界大戦まであんなに日本軍とかそういうことは出てこなかったでしょうね。その証拠に、豊臣秀吉が朝鮮征伐をやったときに、征伐した同士

が戦さをしたり喧嘩したりしているんだよね。

A氏 確かにイギリスも、一時、国王がいない時期があったでしょう。どうしても国王がいないと一体感がない、やはり国王があったほうが良いということで、復活して、結果的に国王が国全体をつなぎとめたというようなことはありますね。

今野 タイの今回のクーデターだって、国王の発言一つでパッと固まって落ち着いてしまう。天皇制はやはりその効果だったわけですよ。

D氏 日本は、民族意識もない、国家意識もなく、戦争に敗けてアメリカの占領下に入った。ところが、フランスや何かはその段階でもナチスにレジスタンスー我々は映画だの小説で読むけれども、レジスタンス運動というのが根付いているから、自分たちで獲得した自由主義なり民主主義なりという考え方がある。でも、日本はそこは何にもなくて転化したでしょう。

今野 もっとひどいのはイラクでしょうね。

D氏 帝国主義の先進国が勝手に分割したエリアですからね。

今野 シーア派かスンニ派かクルドかというのが社会なのであって、それが一つになれといっても、そんな簡単に時間もかけないでなれるはずはないでしょうね。

D氏 日本は島国だから一つで済んだんですかね。

今野 それでも実質は大変苦勞していて、明治の初めに日本語がどうして誕生したか、井上ひさしが随分研究していますね。明治維新のときに薩摩と会津

が話し合うなんていうのは、通訳なしにはできなかつたわけです。

そういう意味では最初から一つであったことはないんですね。標準語が生まれたことは民族意識を育てる非常に大きな要因だったというのは、国語学者がみんな言っています。戦後、それがマスメディア、テレビの発達でさらに促進されて、いまや方言が消えてしまった。本来の歴史的なことを言えば、方言のほうが中心だったわけですね。

幕藩体制というのは言葉を随分差別化したという論文がありますね。やはり敵対意識があるから、言葉を強要した。それが近代の方言に生きているところがたくさんあると言っています。

やはり文化とか、そういう自然発生的なものが非常に大きくて、日本の民族論というのを、計画策定だとか忙しくないときは、国土計画局はじっくり勉強しておく必要があるのかもしれないですね。

D氏 言葉はなかなか難しいですね。

今野 その辺や経済発展との絡みというのは、「国民性から政策への圧力は危機感認識と深く関係」していると思います。私の体験からすると、危機を演出しないと政策というのは出てこないですね。私がいままでやった経験からすると、新全総も――三全総はあまり中身がなかったから別ですが、反対がいっぱいあったわけです。

ところが、私はどちらかというと現場型・プロジェクト型だけど、石油備蓄だけは全く反対がなかった。石油備蓄計画というのは平松さんと私と2人だけで作ったんですが、それで新聞からも文句を言われたい、陳情にも来ない。まあ、逆に言えば寂しかったけれども、それでどんどんできていっちゃうんです。いま考えてみると、ものすごくべらぼうに乱暴なことをやっているんですね。地中備蓄だとか、九州のなんか海上浮遊式備蓄でしょう。

D氏 あれは緊急対策だった。

今野 石油がなくなってトイレットペーパーがなくなったのは全員が体験しているから、誰も反対しない。

A氏 鹿児島の喜入の備蓄は誰も反対しなかったですね。志布志が反対したのは、あれは石油備蓄でなくて石油化学をやろうとしたからでしたね。

今野 石油コンビナートですね。だから、政策立案者というのは危機を演出するということがもともと大事なんだと思います。そうするとうまく論理的に整理できないんだけど、国の基本政策の国土政策なんていうのは、民族危機感、やはりここにたどり着くわけです。

A氏 その危機が、食糧の危機というのは、さっきおっしゃったようになかなかびんと来ないですが、国防上の危機があると、これはびたっときますよね。北朝鮮とかね。しかし、環境の危機というのはそんなにインパクト強くないですね。

今野 まだ強くないですね。あれも徐々に進んできたこともあるし、それから、科学技術で進んできたものをかなり短期間に緩和したんです。隅田川に魚一匹いなくなって、総武線の電車は臭くて浅草橋から両国へ渡れないで、真夏でもみんな戸を閉めたんです。それがいまや両国橋でボラが釣れるというのだから、ものすごい勢いで回復した。

B氏 震災の危機の演出はどうか。

今野 震災というのは何十年に1回でしょう。それと一地域に限定された局地的問題です。自分が遇わないと全然感じないんです。そのため、みんなすぐ忘れてしまう。いま神戸へ行っても、神戸大震災なんて誰も危機感を感じなくなってしまった。十年たつとみんなダメですよ。そこが、防災問題を国土計画

の中心にしようと言っても弱いところだなと思いますね。

C氏 まあ、一極集中是正の理由では必ずありましたけどね。いま、一極集中是正なんてことも言わなくなりましたが、「災害にあった場合」という話はありませんね。

今野 東京が大震災に遇ったときはバツと出るんでしょうね。

A氏 おっしゃるように計画の前提として「危機」があるという話は、歴史的に見ると確かに当たっているし面白いですね。90年代以降、日本ではインパクトのある危機がないんですね。せいぜいテポドンぐらい。そういう点でいくと、計画自体もインパクトがなくなってきていますし、小泉さんのときは計画さえもつukらないというわけですから。

今野 そういう意味ではいい時代になっているんですよ。

D氏 それと、情報通信の進歩が危機感を薄めている面がありますね。すぐ代替した機能をよそが持てるという仕組みになってしまうでしょう。集中しているから衝撃が大きいというけれども、すぐそれを代替できてしまうんです。停電があっても、ほかの供給ですぐ電力は復旧するでしょう。電柱が倒れても関係なく復旧する。あれと同じ話ですからね。

A氏 国際的統計をとると、日本人というのは不安と不満が最も強い国民ということが言われますね。

C氏 「将来に対する展望がない」とかいいますね。

A氏 なぜか不安と不満が強い。何が原因かというのはいろいろ議論がある

でしょうが、宗教的な縛りがあまりないということもあるのかもしれないね。

今野 宗教的な縛りそのものは、和辻の風土論ではないけれども、砂漠で生まれた宗教と、食糧危機で死ぬことのない、照葉樹林帯で生まれた宗教とは違うでしょう。仏教なんていうのは穏やかなんですね。また、それだけのんびりしているわけです。米山俊直の本を読んでも、結局、自然に恵まれているんです。緑と水があり余るくらいたっぷりあって、コメがとれなくても、葛の根っこから餅をつくって食ったりして何とか生きていけるわけですよ。

A氏 砂漠での宗教というのは、義務であり生活訓なんですね。こうしちゃいけない、とかね。

今野 ええ。牧畜を中心とする乾燥地帯の食糧生産なんて、一回寒波が来ただけでヒツジがみんな死んで翌年の食糧がなくなってしまうのですから、それは厳しいですよ。そういうところは、結局、長期戦略を見たり、備蓄が起きたりするけれども、我々はそれがありません。来年になればまた必ずコメは実ってくれる。

交通新聞にもちょっと書いてありますが、スイスの場合には永世中立を守るために、小麦とリンゴはその年にとれた分は手をつけられないんです。そういう厳しいことをちゃんと国民が納得して許容しているわけです。

B氏 自給率7割か8割は必ず維持するという政策のようです。

今野 それも計算があって、体重は減ってくるけれど生命には支障がない、肉なんか食わなくたって死なない。ただ、ビタミン補給とカロリー補給のパンだけは必要だということで、リンゴと小麦が指定されているんです。だから原爆が落ちたって平気だと言っています。

その厳しさが日本の文化そのものにはないんです。そして歴史の中では、わずか数回、食糧がなくて200万人の餓死者が出たとか、ソ連にのみ込まれそうだったとか、そういう危機感があつたときだけ何とかしなくてはならないと集まるわけなんです。

A氏 恵まれているから不満が強い、ということもあるのかもしれませんがね。

今野 そうです。仏教思想に「なるにまかせる」というのがあるんでしょうね。それを背景にして出てきているんです。それが乾燥地帯、牧畜地帯に通用するはずがない。インドからベトナムを通過して日本列島まで――つまり米山俊直とか中尾（佐助）さんなんかの「照葉樹林文化」、世界の中で最も恵まれた地帯ですよ。

C氏 最近の傾向は情報が多過ぎて不安になるんじゃないですか。いろいろな話を聞き過ぎて、かつ流すほうも、ペシミスティックな情報のほうがニュースになるから流してる面もありますね。

A氏 格差の意識の話も多少そういうところがありますね。

C氏 あれは、僕は演出しているような気がしてしようがないですね。あれは小泉政権の最後のほうに意図的に流されていて、明らかに次の政権のテーマにするために出てきたのではないかと思っています。それこそ危機意識がないと政権維持もできないからじゃないかと思うんです。あえて格差問題を官邸から出しているような感じがしますね。

実際に月例経済の中で報告したのが始まりだと思います。そのときに「格差がそれほどない」と言ったことで野党に火がついたんですね。

今野 あれは単に野党対与党の喧嘩の解消のためだけであつて、長期的な話

で格差問題の議論になっていないように思いますね。

D氏 政策で何か救済するような話をやって、どういう社会ができるんですかね。

今野 そのこのところは本質論を踏まえていないと思うのが、いままでも全総時代に地域格差というのを非常に大きな問題にしてきて、それは資本主義経済発展の経緯からちゃんと論理的に説明できるけど、現実問題は、最も犠牲者である過疎地に行くと、日本で一番豊かでゆとりのある生活をみんな送っているわけです。それを送れない奴はみんな都市に流れているから、下からの世論にはなっていない。

A氏 例えばイギリスとか、スコットランドとか、身分も含めて格差が固定していますね。そういう点では日本の格差というのは随分小さいものですよ。そもそも、辞書を引いても英語で格差という言葉が見当たらないんです。ギャップと書いてあるんですけどね。

C氏 ギャップは単に「差」ですね。

A氏 それから、ディファレンシー（多様性）。どうも、日本で言っている格差というのは英語にはないですね。

C氏 いま、「希望格差社会」とか言っているわけです。要するにチャンスがないのではないかという不安があるのだと思います。

今野 地域格差は小さな問題とは言わないけれども、ただ、国家存亡の危機というのから見たら大きいとは言えないですね。地域格差がいくら出ても、食うに困って死ぬことはない。あるいは、階級社会が解消した状況というのは、

列国の中では日本は相当進んでいるほうですから、そういうのと結びついていないだけに、マクロで見ると大きな課題ではないですね。

C氏 戦後の全総計画の端緒はまさに格差問題ですからね。戦後の国土計画の危機の演出というのは格差だったと思います。

D氏 そのときにはすべての面でのインフラストラクチャーが未整備だった。いわばいろいろな資源が有限だったから、部分的に進み方がどこかに集中していたからアンバランスが目立った。そういうことではないですかね。

A氏 「国土の均衡ある発展」といったときには、格差問題というのが念頭にあったわけですね。格差問題を議論するときに、ナショナル・ミニマムというのはいつ頃までそういう意識はありましたか。いつの間にかナショナル・ミニマムからナショナル・スタンダードに移ってきたわけでしょう。

今野 ナショナル・ミニマム論が消えたのは全体のレベルが上がったからでしょう。

A氏 三全総あたりですか。

今野 そうですね。

A氏 三全総あたりではもうナショナル・ミニマムは消えていましたね。

今野 ええ。厳しいことを言えば、45年の環境問題が一つの境だったのではないですかね。45年の環境問題と48年の石油ショックというのは、日本経済の歴史を大きく変えた。

A氏 環境も気にするほどになったということですね。

今野 だと思います。あれによって経済の速度が変わったから、公害問題が起きたときにGNPにして3%落ちました。そして、3年後の石油ショックでガタンと落ちてしまうわけです。あれはやはり歴史の大転換点だったと思いますね。落ちただけで、幸せなことに、それでジャパン・アズ・ナンバーワンなんて言われるくらいまで行ったから、危機感そのものには直接つながらなかったと思います。ぎりぎり食っている状況で、あの2つの衝撃を受けたとしたら、ナショナル・ミニмум論なんて、ものすごく強く後々まで言われたでしょうね。でも、公害問題が発生したときも石油ショックも歴史の彼方に消えていってますね。

C氏 ナショナル・ミニмумよりローカリティ・マキシмум。要するに地域性を最大化する。三全総のときにナショナル・ミニмумの話はなくなったのだと思います。定住構想の生活環境、生産環境、何とかというのは、まさにフルセット主義ですからね。各地域にそういうものを持っていきましょう、ということですからね。

今野 ある意味では最低線が保障されている上の議論ですからね。

C氏 ええ。最低線の話はもうなくなったというのが三全総のときですね。

今野 公害問題が大きかったときはすごくショックだったですよ。

C氏 あの頃の役所のペーパーを見ると、もう国土計画おしまいだというような趣旨のことが書いてありますね。もうつukれない、何をテーマにしてやるんだ、というようなことが書いてありましたね。

でも、結局、列島改造論が出てきてまた国土計画が息を吹き返してという感

じではないですか。45年で公害国会ですよ。列島改造論でまた何となく昔に戻っているというか、ある意味では地方開発論だったのかもしれないけれども、あれでまた国土計画のやり方も昔と同じ様式に変わってしまったんですね。

A氏 衣を着せ替えてもう一回よみがえった。

C氏 三全総から四全総に変わったら、さらに新全総的な計画になるわけですね。今度は1万4,000キロの道路をつくりましょうなんて話にもなってしまった。そういう意味では「循環している」というのが僕の論なんです。この間の国土計画というのはそういうところで循環していたのではないかと、という話なんですね。

今野 歴史だから循環システムはある程度働くだろうけど、もう一つ、もっと厳しいことを言えば、相対的には国土計画の必要性が小さくなっていったわけです。国民生活が豊かになって、国土政策の当初の原点からすると、第一目的、最大の目的は達成してきたわけです。にもかかわらず、利権としての国土政策論というのは、パーキンソンの法則ではないけど生き続けたわけです。そのギャップもあるのではないかと思います。

なくなることによって幸せなら国土計画の目的は達成したと言えるから、なくなるのも歴史の中では一つの論理かもしれないんですね。だけど、また必要な時は来るわけです。歴史というのは一つの方向へ直線で行くわけではないし、波風がある。

C氏 政府の中で計画的なものをつくっているのは「骨太の方針」でしょうね。

但し、これらには、空間性とか長期性とかそういうものはないです。まさに空間性とか、長期性とか、総合性を担保していたのが国土計画ですね。

今野 基本的には、計画経済が70年間の世界的な実験結果のあと、結局、自由競争に負けて崩壊したでしょう、その影響なんですね。経済や生活そのものを計画で管理する必要は全くないというのが底流にあって、小泉内閣というのは、哲学があったとすればそこだと思います。それで規制緩和だというわけですね。

C氏 まさにサッチャー政権以降のグローバリズムの中で、日本も同じようになってきたということではないですかね。

今野 競争の結果がもたらすベネフィットのほうが計画に基づく効率化よりはるかにいい、ということですね。ただ、そこで一番悪かったのは、そのような自由競争にのらない領域の問題をどうするのかという答えを十分に議論したのかというと、していないと思うのです。例えば美の喪失とか、環境問題とか、空間の持っている制約論とか、弱者救済、そういうのは競争によって克服できるというのは限定があるわけです。したがって、我々よりはるか昔から自由競争の世界をつくり上げてきているヨーロッパやアメリカという先進国のほうが、日本より、例えば都市計画一つ見ても管理・規制が強い。それを市民全体がのんでいる。そういうギャップにつながってきていると思うんです。

D氏 だから民族だとか何とかと同じで、日本はコミュニティであれ何であれ市民意識がないから、都市計画的な縛りも環境制御の問題も出てこなくなってしまう。そこをどうするかという問題ですね。

今野 そうです。「公」ということをどう考えるかです。

A氏 官ではなくて公ですね。

D氏 パブリックですね。

今野 パブリックというのをどう受けとめるか。それから、パーソナリズムとエゴイズムの区別はきっちりつけてある社会なのか。ジャン=ジャック・ルソーなどは教育学者として、これからは国家のため、社会のためにつくる人間ではなくて、人間個人を立派な人間にしていき、社会的契約を通し貢献することこそが近代社会であり、近代の教育の基本であると言っています。しかし、その個人の意味合いが日本の場合と全く違うわけです。個人的責任をきっちり果たす、いわゆるシビリアンなわけです。ところが、日本の場合はエゴしかないわけです。

A氏 先週、都市計画の人たち、行政の人も学者の人もいるところで講演して、都市計画はユニバーサル行政たり得るか、真っ向からやったんですよ。そしたら相当感情的に反発されたけれども、例えば、本当にコアの行政としてこういうことをやったということをごどこで示すんですかと申し上げたんですよ。例えばアレックス・カーの『犬と鬼』というのがあるでしょう。あれなんかどう思いますか？ と。ヨーロッパではまさに都市計画というのはコア行政ですね。こういう街がいいですよと彼らは胸を張って言うけれども、じゃ、日本で本当に胸を張って我々都市計画の行政はユニバーサルだと言えるところはどこにありますかと、真っ向からやったんですよ。

今野 ソクラテスのギリシャ時代の言葉をかりると、人間の究極的な幸せは国家に貢献することの喜びを感じるということですね。一番豊かな幸せを築くのは、第一段階は所得。第二段階になると、時間が欲しい。第三段階になると空間――すばらしい空間の中で一生を過ごしたい。第四段階は、それよりもっと喜びを感じるのは、国家に貢献してみんなに感謝される眼差しで見られたときの自分の幸せ、これに勝る幸せはないとソクラテスは言っています。

D氏 その場合の「国家」というのは都市国家でしょう。

今野 もちろん都市国家だから、ふるさとと言ってもいいわけです。

D氏 だから、いま言う国家観と違うんですね。

今野 ナショナリズムの国家でもいいわけですが、国家に貢献したかどうか。

A氏 いまの今野先生の言葉をとらえると、先ほどの経済財政諮問会議の「21世紀ビジョン」というのは第二段階ですね。時持ち社会というのを前面に出していますね。

今野 そうですよ。週休2日なんかみんなそうだったんです。安倍内閣になってようやく「美しい国へ」というのだから、第三段階の扉を開けた（笑）。まだ第四段階の話は全く社会的問題になっていない。

ただ、希望を持てる芽はちょっと出てきたというのもあるんですね。阪神・淡路大震災のとき、私は最初から兵庫県交通復興小委員長をさせられて神戸通いをしたけれども、あのとき、誰もかれもがびっくりしたのは、あんなに若者のボランティアが出てくることは想像を絶していました。考えられなかったですね。あんなのが一つの大きな芽になって育ってくれば、日本も本当の意味の成熟社会に行くかなと思いましたがね。

A氏 みんな潜在的にそういう場を望んでいるんですね。

今野 心の底にそういう意識を持ち出してきましたね。それで「やりたい」という気持ちも出てきていて、それが定年退職後のNPOや何かの行動になってたくさん出ているのではないですか。だけど、それが本当の意味で浸透するまでちょっと時間がかかるでしょうね。つまり、本当の意味でエゴイズムからパーソナリズムにできるかどうか。

いまの日本では、ケネディが大統領になったときに、「諸君が国家に何をしてもらうかではなく、諸君が国家に対して何ができるのか問うたことを、いまの日本の社会では本当の意味で理解できる人はほとんどいないのではないかという状況だと思います。そういうことが国土計画の問題、国土政策の必要性・あり方というのに非常に影を落としていると思います。自己利益と自分の社会しか考えない一億人の社会、世界史の中で背筋が寒くなる問題でもあります。

話をもとへ戻しますけれども、この中で次の日本の危機というのは中国の膨張なんですかね。

A氏 それを危機と思うのか機会と思うのか、でしょうね。

C氏 中国の膨張というと、エネルギーとか資源制約というものを何か想像しますね。経済的なマーケットが大きくなるという意味ではいいのかもしれないですけれども、収奪される部分も多いのではないかと思います。

今野 そういう問題もあるし、地政学的なことを展開すると、中国五千年の歴史の中で東シナ海を越えて日本列島に攻め入ったのは元だけなんです。あとはないんです。ところが、いまの状況は、日本海が世界の幹線海上ルートになったけれども、そこを走っている船のメインは中国です。太平洋岸もそれです。日本の海運なんて全く取るに足らない状況になってしまった。日本は中国にのまれかかっているわけです。五千年の歴史を翻すように中国は太平洋に出てきているんです。

日露戦争のときにアメリカの戦略は、アメリカがソ連とぶつかるよりはソ連が日本とぶつかったほうがやっつけやすいからというので日本を応援してくれましたね。そういう戦略論で見たときに、アメリカはたぶん究極的には、太平洋上でいつか中国と衝突せざるを得ないと思っているのではないか。現実にもその傾向が出てきているのが、中国の潜水艦が四国沖や何かに日本の防衛線を破って太平洋にいっぱい出てきています。特にグアム島とハワイの沖合にはウ

ロウロしているらしいけれども、そういう状況になってきますと、コンテナ船や何かが走るというのは、日本の過去の侵略国家の盛衰から言っても、必ずそのあと軍隊がついてきます。

しかも、一番こわいのは中華思想でしょう。もともとが、日本を属国としか見ていないわけです。もっと腹立つのは朝鮮半島の両国家だけど、同じ属国でも、我々は一流属国だけど日本は二流属国だと思っているわけです。いわゆる近世までの中国思想に染まっているのが、金日成だったり盧武鉉なわけでしょう。だからああいう態度なんです。対等には見ていないわけです。その思想と、軍事的な強化で日本列島をのみ込んでいることは、いずれ、日本にとっては歴史的な危機につながっていくのではないですかね。

A氏 いま今野先生がおっしゃったように、中国の問題については、米中国交回復と似たようなことがこの5年間ぐらい行われていて、特に問題は石油ですね。どうもこの5年間は外交が全く空白ですね。

D氏 5年間じゃない、戦後ずっと空白（笑）。

A氏 特にいまの米中が非常にいろいろなことでやっていますよね。このまま自然でいくとやはり戦争になってしまうから、お互いに回避しようという形で、トップ同士で相当いろいろやっています。ああいうところは40年代とちょっと似ている面がありますね。

今野 中国の脅威というのは、資源や人民元対ドルのレート問題とかいろいろあるけれども、それ以上に怖いのは、規制緩和によってカネをため込んだこの日本列島にあの中国人がなだれ込んでくることだと思うんです。満州でもそうですし、チベットでもそうですけれども、中国の侵略戦争というのは日本は帝国陸軍で軍旗を先頭にして行ったけれども、あれはそうではなくて、貧乏人が流れ込んでいってそこに住み着く、定住によって中国化していくんです。ウ

イグルだってみんなそうなんです。ウイグルを歩くと、都市はいまや漢民族に全部押さえられています。本当のウイグル人は砂漠の中のオアシスへ行かないと会えないんです。

そういう形でいわゆる「浄化政策」ですね。その結果、満州族なんか消えてしまったわけです。清が建国したときに建てた天安門でも必ず満州語で書いてあるけれども、読める奴は誰もいなくなってしまった。そういう形で日本列島をのみ込むのではないか。漢民族のパワーですよ。

C氏 でも、労働力を入れないともたないと経済界は随分言ってますよ。

今野 そう単純な話としてだけ考えてはダメなのではないかという気がします。人口減少の問題でも、中国は人が余っているから中国から入れたらいいではないか、日本は歴史的にいままで中国人の血が入っているんだというような単純な話じゃないんです。文化をつくり国家をつくってきたわけですから。

C氏 そうですよ。低レベルな労働者ではないんですよ。昔はみんな高等技術を持った人たちが入ってきたわけですからね。

D氏 それと、世代的につながっていくという問題ですね。10年、20年というのはあっという間ですからね。

今野 同じことは、チャイナタウンが非常に膨れたヨーロッパやアメリカの都市を見ていると、何となくある種の恐怖感がありますね。

D氏 僕は下村博士が偉いと思うのは、高度成長期末期から移民の問題や何かも含めて既にそういう問題を仰言っていたんです。下村さんは「日本は投資をすればいい、人間を入れる必要はない」、こういう考え方でしょう。日本は一体どういう文化的な国の経営をしていくのか、その問題があるから、投資は

世界じゅうどこでもやればいい。人間は日本から出ていくのは出ていってもかまわない。日本の経済を維持するために人間を入れるというのは逆だと、こういう話をしていましたね。

今野 彼らは単に自然に応じて人が国外に移住したりしているのではないんです。僕はコスタリカで勤務していたとき、行きつけの中国料理屋の親父が、今度うちの跡継ぎの息子に嫁が来ることになったと言っているんです。どこから来るんですかと言ったら、アルゼンチンからというんです。アルゼンチンから中国人の女が嫁に来るんです。

C氏 要するにアルゼンチンに移住している中国人をもらおう。

今野 そうです。その娘がコスタリカまで地球半周りに来て来る。そしたら驚いたことに、メキシコ以南のラテンアメリカに移住している中国人のリスト、こんな分厚い名簿があるんです。見せてくれた。それで「これだ」って言うんですよ、会ったことも何もないんですけど。風水か占いか知らないけれど。つまり、人間集団として社会をつくって組織化されているんです。領土のない別国家です。

C氏 やっぱり民族なんですね。民族の塊として存在している。

今野 そうです。そういう民族ですよ、漢民族というのは。それでもって満州族をのみ込んでしまっていて、いま、チベットをのみ込もうとしているわけでしょう。

D氏 この間の上海何とか機構の問題にしても、日本は一体どういう態度をするのか。向こうは全く日本を相手にしなくなったわけです。東南アジアで日本はこれから中核になってなんてことを言っているけれども、どこも中核がで

きていない。ソ連と中国とが手を結ぼうとしているわけでしょう。米中が日本を飛び越えた形で進むときに、日本は何をどう考えていくのか。

A氏 今野先生の資料で、「所得→時間→空間→貢献」で「日本的空間美とは？」とか「美的空間創出策は？」と書いてありますけれども、このところは、例えば都市計画の方はどう考えているのか。私も、先週議論したときに問題提起をしたのですが、日本の場合は都市計画というのは誘導だ。どちらの方向に誘導しているのか。例えばそこにオープンスペースをつくる。本当にそれが日本人の空間美なのか。総合設計とか、特定街区みたいな形に誘導してきて、そこで空間をつくるのが日本の美なのかどうか。必ずしもそれがきれいな都市を演出していないということもあるわけですね。

日本のどういう都市がきれいかということは確かにはっきりしていないけれども、例えばヨーロッパでは、この前マンチェスターとかへ行くと、彼らはマンチェスターはこういう都市だと思って、それを壊さないようにしようということで、それを保存するために都市計画の行政があるわけです。日本の場合、誘導というときにどちらのほうに誘導するのか。そのときに、「空間美とは何か」ということをちゃんとしなければいけないですね。

今野 私がここで「空間美」というのを出したのは、中国人は集団してチャイナタウンに住むでしょう。それを放っておきますと、みんな香港型になるんですよ。看板は無制限に出ていて、洗濯物は窓から飛び出ている、どこを歩いても小便臭い。

ところが、その中国人が集団で住んでいるけれども、バンクーバーのチャイナタウンはどうか、ロサンゼルスチャイナタウンはどうかというと、全部が勝っているわけではないけれど、やはりヨーロッパ型の美しさに中に負けてとけ込んでいるところがあるんです。ロサンゼルスチャイナタウンなどは、やはりちゃんと自動車中心の、非常にゆとりのある戸建て住宅を中心とする住宅地に中国人が住んでいる。たまたま地図の上に落とすと、そこは中国人の率が

圧倒的に高いという形で、香港型がどこに行ってもあるのかというと、そうではないんです。

だから、日本の中の空間美を持った都市にしていくことによって、100%こちらが勝つ保証はないけれども、放っておくとなってしまう香港型に落ちなくても済むのではないか。環境決定論ではないけれども、そこに環境と中国人のものすごい圧力との戦いがあると思います。それを見据えた意味で国土計画や都市計画を議論すべきではないか。それに完全に負けてしまったのが満州だと思います。だから、この2ページの下の「中国の巨大な人口圧力と中国型縁辺侵略システムからの圧力をどう受け止めるか？」というのと美の構築というのは、非常に絡むところなんです。

中国から留学生に、「日本で一番感心したことは何か」というアンケート調査をしたら、まちがきれいだ、落ちているゴミが少ないということなんです。そういう所へ来ると、彼らは、ゴミを捨てない、それなりにモラルの高い生活をするわけです、日本にいる間。そのせめぎ合いがあると思うんです。

人間居住と空間という関係からすると、これはまさしく国土計画なんです。そこで日本の将来像をどうつくるのかという国民合意、まず日本人はそれをやらなくてはならないから、潜在的に政策需要はあると思うけれども、切羽詰まってないから動かないんですね。食糧難だとかロシアが攻めてきたとかいうのと違うから。

A氏 所得から時間・空間といったときに、どういう空間が必要かという話が出てきますね。

特に都市計画とか地域計画の行政の場合に、どんな空間美をつくるか。ヨーロッパなんかの都市計画というのは簡単ですよ。保存すればいい。例えばデフアンズとかドックランドというのは、中を保存するために難しいものを全部外に出しているわけですがけれども、日本の場合、まちごとを全部つくり替えて、ニュータウンみたいにしたり、それから保存したりという話ですから、非常に難しいんですね。

今野 しかし、パリの場合を見ている、競争と自由に任せていないでしょう、美の創出という意味では。例えば赤色は使ってはいかんとか、赤い螺旋のはレストランだけとか、立て看板はいかんとか、いわゆる「コントロール」があるわけです。

だから美しい国づくりの基本としては、哲学から持ち出して、それを維持するためにはコントロールもあるということを知らないと、いままでのように開発計画だけの政策では国土政策と言えないわけです。国土管理という面が出てこざるを得ない。それが出てくる必要性があるというのは、環境問題と美の創出があるわけで、そうするとコントロール面が出てくる。そのコントロールを位置づけるためにも、いま、国土計画はそういう問題を議論すべきなのではないかと思います。根底はどのような社会意識を持っているか、責任を持つ市民、国民が形成されているか否かに関わるのですかね。

D氏 その場合に、私的な土地所有と利用についての制限をどうやって織り込むか。いまやっている都市計画とか何かは、プレミアムをつけて誘導することだから、その妥協の幅が、いいほうには全く向いていない。

今野 そこに対して答えのならない総論の答えだけど、そこをつなぐのは市民の合意を得ることです。権力者側は合意形成のための努力をどれだけしているか、ということが大事なんです。

パリの場合でも、旧市街地は非常に統一的な美がありますね、2階の欄干はいろいろ彫刻した何かを飾りましょうとか、外壁の色はここからここまでの範囲内しかやりませんよということが決まっていて、それが花の都パリを演出しているわけです。あれは、話が出てから市民合意を得て今日に至るまで何百年の時間がかかっているんです。しかし、市民合意が背景にあるからそういうことができるので、上からの権力の指示ではないと解釈されるのではないですか。

C氏 そのときに、いまの日本人が「美しい」と思う、あるいは「こうあり

たい」と思うモデルといますか、そういうのがはっきりしないからではないですか。

今野 その造成を努力しなくてはいけないけれども、そこを教えられたのは、バンクーバーにO E C Dの会議で行ったときに、海底油田の開発なんて議論をやっても面白くないから、飛び出してバンクーバー市役所に行って、4日ばかり市役所通いをして、バンクーバーの都市計画の話聞いたんです。あのときに感動したのは、当時、地下鉄の計画をつくっていて、その話を事細かに聞いたんだけど、彼らは、市民に説明するのが計画屋なので、図面の上で三角定規を持っているのは計画屋じゃない原案作成者だと言ってるんだよね。

C氏 ネゴシエーターと言っています（笑）。

今野 では、その説明をどうやっているのかといたら、コミュニティ単位。つまり、中庭一つ単位で毎日行くのだそうです。それで、今度走らせようとしている原案は、電車がこういう形で、能力はこうで、したがってカーブは何メートル半径でしか曲がらない。しかし、あなたがここからここまで行くのに、いま自動車で行っているのより何分間も速くなりますよ、料金はこれだけですよ、と。経営計画までちゃんとつくって説明しているのです。

C氏 バンクーバーならバンクーバーでも、あれは、イギリス型のこういう街並みが美しいのだというひな型があって、それで都市計画ができています。それに対して日本の場合、さっき用途地域の話が出ましたけれども、これは内務省の飯沼一省という人が一番最初に持ち込んでくるわけです。そのときに、用途地域はむしろ誘導するために使うんだと言っていますけれども、もともとイギリスでの用途地域設定は、現状を守るために用途地域を固定したわけです。既にでき上がっているものを保存するための手法を、日本の場合は誘導する手段として導入したけれども、その先をどういうふうにしたいのかとい

うビジョンがないんです。

それで時流に流されて、いまみたいに経済原理が重要だとなると、今度はプレミアム主義でどんどん高層化するということを書いてみたり、急に低層が大事だということを書いてみたり、そこら辺は、固定した美に対する意識がないことが問題なのではないかという気がしますね。

A氏 例えばドイツは、地域住民に任せて住民で判断して自分たちの地域をつくっていく。フランスは行政がリード的な役割を担っているし、イギリスの場合は、住民というよりは、王立建築家協会というのがあるって、有形としてはこういう建築が望ましいという形で、個々の建築物に対してかなり口を差しはさんでいますね。

例えばイギリスの都市は、何百年かけて俺たちがちゃんと口をはさんできたからこれだけいい都市ができているというのがあって、皆の合意力があるわけですね。日本の場合は、保存の段階ではなくて、まだまだ開発だという話もあるし、その中で行政の役割が何なのか必ずしもはっきりしない。

C氏 これからつくっていかないとダメな部分が多いんじゃないですか。

今野 日本の場合、行政というのは――長いこと行政で飯を食っていこうという志の人は支配者であり、命令を下す将校になりたいと思っている人なんです。住民が下士官であったり兵であったりしているわけで、そういう関係でしか行政は計画していないのです。だけど、バンクーバーのその都市計画屋が言うのは、計画屋というのは原案提出者だ。

いくら住民の意見を聞けといっても、住民に専門知識がないのだから、ポギー車を使えば半径何メートルで回れる、ポギー車を使わなければカーブはどれくらいしかとれないとか、地下鉄をつくるのでも、そのために断面はどのくらい要るとか、そういうことは専門家しかわからない。だから、その原案はもちろん行政だけれど、それを決めるのは住民投票で市民は原案をYesかNoと決断

する。そのためにも原案をちゃんと説明しなくてはいかん、と言うんですよ。

B氏 けども、原案をつくる能力が行政にないんですよ。インハウス・アーキテクトというのがヨーロッパはいますね。日本の場合は、インハウス・アーキテクトというか、そういうプロフェッションがないんです。2年くらいでころころ代わって、昨日まで福祉の現場の人が今日は都市計画課長という世界ですよ。そういう問題はあります。

もう一つ、国土交通省が都市計画をやっている地方自治体にアンケートを出したんです。都市計画家が一番困っていることは何かと。そうすると、住民と行政の間をつなぐ話ができる人間がない、そういう人が欲しいと。

今野 バンクーバーで言う「計画屋」ですね。

B氏 もう一つは、住民側も実は成熟していないという、実は三重苦の状態。僕なんか現場でやってきて、いつも、その三重苦の間をつなぐ役回りをずっとやってきたんですけども、それはいまだに続いていると思います。

それから日本の場合、国家が都市の形を明確に示すことは一回もしたことはないのではないのでしょうか。例えばナチスは、都市の形を明確に出すことによってある種の統一原理みたいなものを出すとか、ナポレオン三世のときはまさにそうですよね。国家権力と都市の形というのは非常に結びついていて、ある種のイメージをつくり上げる。日本の場合、近代国家になってそういうことをしたことはないでしょうか？

今野 それは評論家的に言うと、ヨーロッパは都市国家であって、日本は農村国家、村落共同体社会だから、その辺が慣れていないところはあると思う。私は地方公務員を6年やりましたがけれども、地方自治体にもまさしく能力はないといえる。行政執行力はあるが企画力はないのが地方で、企画は中央集権で中央が一手に握り財政負担もしてくる。このため、権力が腐らないように人事

を回すだけなんですね。

B氏 単なる手続き屋なんです。

今野 専門家が育ってこない。人も金もなく、能力がない。しかし首長は大統領制で選ばれ、権力執行をしたがる。それはもう痛感しますよ。港湾なんか僕はホームグラウンドだけど、港湾を大学でどれだけ講義しているかという、ほとんどないですよ。あれを育てるのは役所なんです。だからといって役所と密室審議会では住民は置いてきぼりになってしまうので、それが下りていかななくてはならない。住民集会で説明しなくてはいけない。

B氏 都市計画は92年の大改正で、地方自治体にどんどん下ろしていったわけですね。受けた地方自治体に実は能力がないということがわかって、今度の例のまちづくり三法、一部、県知事に戻すとかいうことをやったりしているわけです。非常に残念なことですね。

C氏 バンクーパーもそうだと思いますが、きっとプランナーというのは、民間から派遣されて机をもらって座っている人なんじゃないですか。

今野 それはこのあとに書いておいたけど、本当の意味の政策がわかったコンサルタントがあるかないかの違いともからみ、これがまた大きいのです。日本では提案のない社会になってしまっていて、権力の意向を伺って、委託調査だけしかできないコンサルタントになってしまっている。

A氏 欧米では行政と民間の垣根は非常に低いですね。例えば我々が向こうに行って会う人は、よくよく聞くと、アメリカでもイギリスでも、大体民間から来ましたという人が多いですね。

C氏 あるいはディベロッパーが入っているときがありますからね。あとの土地の売買まで権限を与えられて開発をやる、そんなのもありますからね。

A氏 国民が何を望んでいるのかというのがはっきりしないと、計画という形、特に国土計画というのはできない。空間美というのがいまひとつはっきりしないし、例えば「豊かさ」というのは何を求めるかというものはっきりしないから、確かに上から与えてしまうと簡単ですよ。みんなこういうものを望むべきだと。まあ、戦争中がそうだったわけですがけれども、ただ、なかなかそうはいかないとすると、ここは、国民は何を望んでいるかどころではなくて、不満と不安が非常に強い国民ということでいくと、計画をつくるベースをどうするかというのが一番大きい問題ですね。

C氏 そうなんですね。例えば、中国の膨張に対する危機意識は国土計画としてきっかけになるというのはわかるけれども、そのために作る計画は、まさか戦争中のような本土決戦とかそういうことを想定するものではないだろうし、計画の項目というのはどんなことになるのかな、というのがありますね。

今野 まず第一歩は、率直に言って、横須賀、佐世保に匹敵する軍港を大湊につくる。津軽海峡を通過する船の大部分が中国船になってきている。津軽海峡というのはいままで青森－函館の縦の船しか走っていなかったけれども、横の船のほうは圧倒的に大きくなってくると、あそこで事故も起きるし、国際問題も起きる。いままで全くニュースになっていないけれども、頻度として10日に1回ずつ国籍不明の潜水艦に連絡船が追跡されていた時代もあるわけです。そういうことに対する国土はどうつくるべきなのか。そうすると、いまのあの陸奥湾、津軽海峡ではとてもダメです。その上で経済的拠点形成の可能性を考える。

そういう国家経営的な観点、それは軍事に結びつくと非常に危険な思想になるけれども、あそこを通過してアメリカ大陸に行く大圏コースが世界最大の幹線

になることは目に見えているわけです。となると、その幹線の海上ルートを活用した工業再配置とか地域経済の活性化というのを、例えば苫小牧港と八戸港を中心にして考えられないか、陸上交通ネットワークや産業配置はどうか。それがこれからの中国に対する国土計画――中国にのみ込まれることを前提にしたときの日本の国土計画の一つになってくるのではないかと。

それから空間美の話も、鈴木忠義先生からの受け売りみたいな形になるけれども、第一段階は、空がどれだけ見えるか、緑が何%占めているか。これをクリアしただけでもものすごく大きくなると思います。例えば仙台の青葉通りは、建設大臣表彰で全国一きれいな並木だといわれているが、あれは僕が中学生時代にはこんな苗木しかなかったわけです。それが50年たつとあれだけ立派な並木になるわけです。それが契機になって、光のページェントというイベントまで出てくる。緑があるからですよ。

日本人はまずそこから始まって、その後には色彩心理学を使った都市計画論なんていうものが出てくる。これは第二段階。色彩を統一していくとか、コントロールしていくとかいうのは、その後、空間デザインの美という議論になっていくのではないかと思います。そういう意味で、そう難しい理屈だけの話ではないと思います。

僕が国土審議会の委員をしているときに発言して、日本で最初の国立公園の瀬戸内海が松食虫に食われて枯れ木しか見えない島になっているというのを、日本人は美的評価としてどう考えるのか。まず松食虫に食われた木を切って新しい苗を植えることが、美の創出の国土計画論の第一歩ではないか。国はその松食虫対策のカネを補助金で一部出してもいいのではないかと、というようなことを言いました。それでなかったら、瀬戸内海の美はエーゲ海に匹敵するなんて、努力しなかったらあるはずがない。やることは、そういうことでいっぱいあると思うんですよ。

A氏 先生がおっしゃった前者のほうは必要要件的なところがあるけれども、もう一つ、計画には「夢」というのを与えないといけない。その夢が、いまお

っしやったところでは「美」というのがあるんですかね。いままでの全総というのは、そういう点についてなにがしかの夢を与えてきたわけですね。経済が豊かになるとか、みんながよりよい生活になるとか。その夢が何かというのが、一つは「美」なんでしょうね。例えばそれは空間ですね。じゃ「貢献」という話になると、これは国土計画を超えているのかも知れませんね。

今野 いや、国土計画プロパーの話ではないですよ。それから、バンクーバーで都市計画課に4日間くらい通ってショックを受けた一つは、「バンクーバーの都市計画の基本は何ですか」と僕が質問したら、それは2つあると言う。

一つは、バンクーバーの港はどこに建物を建てても必ず見えること。バンクーバーはもともと港町ですから、メインストリートは全部港から見えるだけの幅を持つ。北バンクーバー市なんだけど、それはグラウスという火山の緩傾斜の裾野なんです。それで街のどこからでも港が見えるように容積率や街路が計画されています。

そのため、どの家からも2階を建てると、2階の窓からは少なくとも海が見える。それで建ぺい率の規制もやっている。

もう一つは、背後地のグラウス火山の火山が見えるかどうかというために必要な道路の幅がある。幹線道路に出て振り返れば必ず山が見える。「これが北バンクーバー市の都市美の基本です」と。その基本を議論することが、各地域、地域にとって重要だというのですね。

もう一つ、ものすごくショックだったのは、ライン川を上下したことがあります。ライン川に沿って鉄道と国道が走っているんです。鉄道でボンからマインツを経てフランクフルトまで行くとわかるけれども、ライン川というのは古城がよく見えるんですね。それは列車の車窓からライン川を見せるために建築規制があるんです。車窓からの景観が邪魔されてしまうから、道路と鉄道の川沿いのところは建築物がつかれないことになっていて景観は列車の乗客、自動車にとっても財産となっています。

D氏 いまヨーロッパは田園との関連でも何でも、そういうゾーニングの規制がものすごく厳しいですね。

今野 そういうことをなぜ日本はできないのか。それでヴィジット・ジャパンなんてことばかり言っている。

A氏 所有権の問題もありますし、建築自由みたいな考え方が強いですね。

B氏 それから法律が、都市計画法は都市計画区域しかダメ、あとは農林省にどうぞという話ですよ。

A氏 本日はここまでにしめましょう。どうも有難うございました。(了)